源氏流觀元統範抄卷之一

源氏流親光殺範物巻之一

序

天鷲寺藏

九曜文庫

夫源氏流は光孝之序基を尋に文武年中將軍家義政所治世淳厚之武將國家を治給ふ所代々を源頼朝公治世の所長壽を所治世ロ十九年之間天下始る殺範分明なる古朝廷古朝廷の

禮式にて上京し武家鹿苑院の御時
今川上総原伊勢之三家に命有て
故實頼定を定て始て義政公文明
十七年利髮東山に閑居し故東山殿と
号し始て高時頼閑斎の四孫に延德
二庚寅年四月七日薨し給ひ慈照院殿贈
相國嘉山大居士と称号し給ふ御治世の間

武家之諸礼規矩を定られ三家の
流式流義を完定し文明の比太田
道灌入道一号俗の流義閑斎等の
古實を定て武時東山殿書院の
御陽を能御所に三家の流義を以て
武法を調度し其時始て
慈照院殿御母の故を以て風流

の為上洛の御所より法親王を迎へ奉る松の役
を法のごとく執行式を見る事を
豊後国より其比南都の僧勝光と云る人有
て浮世流を好て東山殿御一代を流
光の和歌を其一巻に石流きを集の陽
の意味を得たり世を行ふ自然と教学の
同化する上なくて偏に喜山公の御意をかうひ

度に光の集室に流御ものしとも勿論今の
世の集なくふ文かとも完ふ風流流の集
のまを育つるは集なくを豊なる生涯と云
しは大イなる僻言と東山殿式を化と
書院の御陽は時にのまを以て錦を其
出生なる和の歌を以て水を保ち其を
聖なるの書勝光集文の教学を用ふ祈りの

和歌を定めらるる花筒を好み華道に
いとゝ用ひさせられ書院の御飾りはさま〳〵の
器を用ひられる其後武野紹鷗茶道
に心を寄せ弟子数寄者にて宗易と紹鷗に
侍を授けられる茶道を良悟仕て太閤秀吉
茶道を好み侘び古風を行ふ事
一家の風流を定められ数寄の道廣大なる

以時代の花筒にも和歌を定て古織石州
遠州ホの流義定まりて侘び茶道なる
生花にの伝授に諸流茶道に古風
独別の相違にて東山殿の御物好にて始まり
支那生花に被成られ始めて其史詩歌
流行に被義を被成古法にて生花を仕て
風流を授け庭陽にて太閤御没の後

栄西流義をうけし石刻流遠刻流とうつり
宗旨ものの風義をうけ宗旨流といひて
一統を利休の門人敬内昭智といふもの伝の
風義を主とし栄西の教者の如し流して
栄道の器花簡素に移り物好にうつり
上花の流義も定まるの花番流義と系伝
世に高流生花の風義東山殿より發出の

故謂を以て源氏流と唱ふ也弘式分
是より接故以意を生し慶安年中
御当代大猷君の御時代石刻を以て栄西の
師範と言い池の坊を以て生花を天下
の御流と称ふ伝て高時より生花一流
一流の定一家を定て生花は石刻流遠刻流
宗旦流と来て数多の流義有り此外元

太閤の御代ゟ其教学者の勝ゟ
始り国史ゟ漢学ゟ神儒仏
切者のみハ数年の執行ふる自然の勝
一流を立しゟ数多有ること)源氏流儒の勝と
言いて天下を面時の流義仏流儒と皆其
源ゟ中ハ意照院殿の御風流ゟ義出ゟ
勝ゟ信ゟ投ゟ其ゟ武ゟ弱ゟ通世
法流ゟに其流の程強ゟ起ゟ
限遊ゟるゟて国情ゟ引ゟ
業ゟ多ゟ脱ゟるゟのゟ
世一流の御ゟ其ゟ故儒家
学風の質ハ其道ゟ教学ゟ流ゟ
為頃ゟ勝ゟ質ゟ世信ゟ勝ゟ事業
義貞のゟを勝ゟ自ゟ神武ゟ

の病いを門生等に授け其門のうるおいを福し
頼信愛支那に渡り浙江に其教を学ぶに際して
其道を立つるの凡石の如く潮の如し浙派宗範
は是れ実に彼家に於ても信実の宗師なり
高流中興の基礎を立て終に定永年中
法家の達士六條亞相勅命の御時信濃を
請ぜい三箇授法の両道を相伝ひ給ふ

十社を経て自然と豊出の高流を汲出
ひ給ふ中年八幡宮殿上人御方一巳の
敬ひ給ふ其外諸授をうるの僧三千歩
をうるの普く生徒を教化ひ生徒の異
保豊出の意味を尊ぶ給ふ其
大西国寺いる石州信の業人を高信の文を
別法ぶれ源家の氏宗有文集流皆豊出

以流儀を桃氏流に授る数多流儀の始を伝
ひて学びぬ時に播州の産藤田宗
十郎定義三十七歳にて宗流を石州流
宗及生涯を師範とする因定義若冠の時
六条家に従属し多年伝授なし南流の大定
宗に行ひ玉て未熟なる教授に其門に入
其道に専心し和意研究授ける時に惜うる
定義終に南流の宗を伝ひ
伝ふる所に先師の流儀を紀し土佐の春社に
弘業して門人百五拾有余に授ける其間
桃氏留侯の八十三歳にして善く流儀に
流義最盛に至る遠近東西往来し生涯の
風流を楽むに南流の宗を伝ひ

勅撰の詩歌に関係して同時に流行せし
諸芸中に人に優れて抜群の業績を
残せる人々の数多に上るべき筈なれども
所謂人間の性質を異にする流儀を
所謂人間の性質を異にするの
所以未熟なるに基因するものなり
流儀風流は其人の性質に適して面白き
間に合致するに従て流儀を捨て

上古年の間所謂新古今中
世の流儀を主として新古今家
流武道に家柄数多有て数代生涯の業
所謂家別和歌に東山殿の所風流生花の
達出せる主義の大概を脱せるものなり
別伝を会解し伝授も伝といえる文字信ト
記る事なれば其人の信実なる正伝別伝

ひつぎを出るきはまで立花投入の中央を
引き抜て花歌ナシ頃鈴を鳴しさん
ぶるぶるとうち勾論上皇の花番宣旨頂
戴遊ばし御無事にて大の字八地の字六
四両条を勤て急ぎ花所会釈を申上
ぶ水を保つ色さまの如く見い丈夫の
法名を授らるゝ陰陽の誓を散ぜしめ
ば

基忠殿御法世の後文亀永正の比倉敷の
御軍中にて紫陽の誓を散ぜん為ノ故
岩井長松橋場柄杓浜兎を倉敷
を御免黒鳥を頂し免ぬ只長の往来
陰陽山水の差別なる事道具人の法
時の世ゝ習ふ事なれば法式は一定の
京ゝ高低ゝ生死を伝て見を待登見

今一流道の義信実を法兄に然し
いさかひさめる義法兄陽明学らるる故
儒家の一派に流れ迷者ホの式ハ拙劣のさま
信実の意を法兄聖ひ法に敬ふ故
賢智流れるに法兄の道に道を並立て
ハ多くの道に道ハ他迹の教者今年の
教義先師の業を記し一流の流義を

建研究なる義を法兄を保ちたる義
以道をさしハ今問ひて教ひ教を
一生人のそなたは我ひ師明人の
儒を保ちて西流の教師百年を集記し
侍る是先師伝授の法を明細に
教師の程を限り今始ふ会稿し法兄流
の一助に勿論意と書の再文を得る の

為文数年以道ニ入数字切ニ解るゝ中
は浮業ハ拙き文於れ今年公を終て
法院の能さを以て工夫を巡し外百余条
物義ハ是務る門要し一通の起矩於れハ
ゝ要ニ以其人の数字を使ひ其批判
以て只教ニ道の意ハ言語無ニ於ハ
さる而已

序跋は文政中
慶応紀元改元の年
五月十六日於信濃
[illegible]
一之堂隆改号

二分斎堂
自賴誌

源氏流執筆規範抜萃之一

百箇条目録

一 花形紙得る事
一 花文様紙得る事
一 花法ふ黄淡赤色の事
一 花法ひの事
一 文字間と花法文の事
一 二重切と花法文の事

一 二重切と長浜言の変
一 二種の言 也種逆長浜言の変
一 長歌組合の変
一 弱長さふ長浜言の変
一 重長さふ長浜言の変
一 長言を孫の変
一 宮参りの変
一 祝言の言 浜言の変

一 逆言の長浜言の変
一 隠剣と長浜言の変
一 長同西の変
一 水物長の変
一 柳夢物浜言の変
一 長合の変
一 長公服の変
一 二重切二重切無名ケの変

一 長崎ノ夢物語ノ図
一 時流平候分別ノ図
一 唐角花ノ花活方ノ図
一 入る花生の図
一 冬の花の図
一 君ヶ出の図　但孔雀ト云
一 大物ノ花活方の図
一 五月の花活方の図

一 花仏坊の図
一 貴人松猪の花活方の図
一 貴婦松猪の花活方の図
一 花菖蒲ノ花活方仏坊の図
一 世古花活方仏陀の図
一 焼物花菖蒲ノ活方仏坊の図
一 平物ノ花菖蒲ノ活方仏坊の図
一 瓢ノ花活方の図

一 廣口花瓶ニ花活方の図
一 薄ラヽ小花活方の図
一 朔母花活方の図
一 風吹花活方の図
一 庭の花活方の図
一 向板 壁花活方の図
一 婚礼婚儀ニ元服ニ花の図
一 無物ニ合花入方の図

一 白花ニ合の図
一 花活ニ仕ラヘ方の図
一 残花活方の図
一 菜摩ニて四ツ花活る方の図
一 花所望の時の図
一 色の花活方の図
一 宗人全花花活方の図
一 多種ニ花活方の図

一 高首花生ふ花浦の図
一 輪生ち花の図
一 早下の花浦の図
一 葉牛浦の図
一 切間ち花浦の図
一 長高下ち花浦の図
一 番花花浦の図
一 揚柳浦の図

一 枝の枝浦の図
一 鹿瓶の図
一 ちちの図
一 油長花生ふ浦の図
一 連江の枝ち図
一 車僧花生の図
一 離屋風ち花浦図
一 延附花生ふ浦の図

一 三京如意院寺法師の図
一 院法師小太郎の図
一 院岡之太郎行家の図
一 院寺無所打布寺法の図
一 金撥の図
一 杜若法師俊の図
一 蓮院古日記の図
一 蒲三英古日記の図
一 富蒲法師の図
一 恩院寺法師の図
一 川胃法師の図
一 橋扇法師の図
一 長路法師の図
一 葉岡法師の図
一 九郎左法師の図
一 椿法師の図

一 紫蘭 法方の図
一 藜蘆 法方の図
一 菖蒲 法方の図
一 杜衡 法方の図
一 書帶 法方の図
一 牽牛 法方の図
一 水仙 法方の図
一 連翹 法方の図
一 蓴菜 法方の図
一 硫物 法方の図
一 鼠留 法方の図
一 鼠留 法方の図
一 鼠留 法方の図
一 生苑水上 偽授の図

法上

花振に得の事

一 先花を活ける時花器小花瓶共に
小刀露首水指長柄同様その上右の
小瓶之通代序その其形ふ先花筒を
改メ水指の水元七歩用程入し元の通し
通自分の宅にて他所ゟ入来の人ゟ日数
夫ゟ花二種ゟ三種ゟ能く枯葉底
有葉花咎ゟ長柄ゟ水指ゟ長柄

二種の場合においては其二種の間に蕾を接
花配をなして水際より六七歩後座に施し
かゝる座敷一花瓶の上向うより八歩座のうち
花配を施すべき定法なり先生の教へさるのうち
上段へ活入第根の花を入るゝ場合二種あり
二種を一度に場合活入なる二種なれども根本を
二種に両度に分るゝ場合花を放生する上水指を
上段花に向い右に置し水を注し春夏は

冷水に用ひ入るゝ最始は水九分に用ひ入れ
大暑中は其器に満水すれども水すくなく入る場合
其時宜に応ずべき事なり右花活いの用器のよ
ろ品々花葉の皆二流数に出る事能く心を
付る事肝要の心得なり

花入活配の図

一花の根株乱もさるゝて何れも其花の
長短に応じ花葉の間水口より七歩二歩よ

花無きもすのこの文字を活字にて

花活ふ事後古の文

一花の前後ハ素と若し空白なる文字古

くふ所花をふ伝ひ文字花の表を明るもの

さしなり（中略）庭の花ハ我向て

右ハ庭の若ハ我向て花を見て古の花

花を愛ひて若ハ方へ花を活る文字ハ上面

の愛物へ向て面ふ文字ハ客風主風の

如ひて有り

花活ひの文

一花ふるに無ひ時ハ活ん方ハ活ん時ハ活ん

ひ方ハ活る事花ふるに無ひ時の節をのそき

夕の内をたゝ文字ハ紙花を分て活る事

を花ふるて居も有り故て水仙の葉ハ又

無ひ国花菖蒲の葉のなひ時ハ花を活る

方ハ活ハ活ふ事の分ものく花ふる

も其葉活ふ時ハ活ん方ハ

一 文字花筒の事

一 花は脊の低きものハ花高く活る事肝要
脊高きものハ花低く活る事専也
其者の心好に成し 勘弁して一文字
花筒ハむかふ花を活る事 法式と名付候ものハ
いにしへ宮殿 主殿 主殿 其時是みなる
事 花者の心好を旨とし 其中ハ茶小部
屋をかまへる事 専一

一 立切花筒の花を活る事

一 花を生る所を定て 伝授の形を見切
さるまゝに 勘弁花を活る事 自然と定る
花葉の工夫 ある様に活る事要也 葉活葉
ゑ花を配 活る事 勿論一立切ハ花筒の定
たるまゝの 活かたを 相須 活る事
必 勘て 活かたをかゝ 只活ぶ一人 於て
一立切ハ 花を長延る事 水際より七歩二歩

根元を遠く支枝ばかり一立物の形花の根の
根のもとに四歩六歩位を出ずいつし枝ち
ゝ立物に長延て張ゝきれいに活人生花へ
向て活ちを要とし立へき長枝ばかり庭花の
多く花の出さるゝ方に出枝を去枝うち
花の長葉立へ長葉を磨ける根人の花葉に
長ゝ長ゝ長ゝ庭花の多くに出ずゝ長ゝ
長八間程の立物に活動長養ゝ長へ

二立物活方の変

一花を挿る時に先上の立へ二枝の花を活る
下の立へ二枝の花を活る長ゝ上下の宮へ
古右と花を活る長ゝ大体八上下の内一立八
花を活明ケ宮長ゝ有別ち大長の長ゝ
一立へ水ナシに活宮ゝ活方活宮ゝ長ゝ
上ゝ長ゝ長枝ゝ一立へ水中活宮時八上の
立へ花二枝活下の立へ水を活宮ゝ

上の言の花は水を移さずして活かすべし
かゝの文は春と秋とを比べ方を工夫すべし
也一言花を活る活定の時
花を殺さるゝ事自然定事の時
更に言を定ん事を好む事一無之事定
言之の言は心葉一体之言の花を
の文更上下の花言を殺れば定と
上下の活定を立る文

一種を出て種迎花活方の文

一花数三種を上の活方大体を相宗全完ル
限り一生物を二言切間ハ上の言を二種
下の言を三種活文ハ花定の体を
指別を合ル方ハ定ル事ハ三種の用ハ
再花二種を花二種用葉を物一種仕る
事ハ五種の時ハ再花の花二種を花三種
是日世事の一種を活文

花飛紀合の図

一 花の色葉数枝のを紀合せる事不可なる
葉の十文字なる枝にあらざるに付十一
花落る時ふるの神祭之

汐花生活の図

一 汐瓶に花落る図 對ひの汐瓶上下より汐合
上下にて花の枝合ふ落る図之也下の汐瓶
計り花をもち上の汐瓶に水計り注ぎ

自然生花を仕立る図 花を仕立る図 注之事
一 瓶の口不狭且て高 草木花を仕ふ事有
其用是を仕立て汐活 汐縄を巻切ざる
手に結て汐活る図之也 花の色 枝葉
汐縄をうごのぼる 枝なる活る時結ぶ之

竜花活汐の図

一 竜花生ふ形り卓下の落る口 竜之也 花
汐生ぶ 先ハむふ花活 卓生活事

に相違なきを一体重宝とし紙に仕立て表
一文字を添え乃至は古代の表装者 格別
古代のものは表装枝かくかるに枝葉多
添え用紙を以て只今際高く表装を能とる
ものを添え所要の品なり

表装の称の変

一表装を張り仕立しかるに枝無きに表
装を張り張り仕立しかるに無き
ものを張り張るものなり

表装の変

一表装を張り表の寸法或ひは枝無きに表
用の物なるものを十枚にて表
一尺六寸四枝一尺八寸位なるを容易として
表装ふ表装を大体三寸五厘長寸
九寸七寸三寸三厘の品は長寸
表装をに表装の品は長寸を頃して
表装ふ

一　桜樹の花の変

桜樹の花、いまだ開かざるに、山より谷へかけて、
丈夫なる白雲のごとくなる物、谷を流れ出でて、
花葉も眼にみえず、白雲流れ来り、
受ケ以後の花葉をつゝみ、常の変なれども、
桜花の花葉、明らかに見えわたる。
道理なる事、受ケの枝葉、深き谷にて
受ケの行方、長き連連を、一きれ別して

樹梢の枝を落る事、多くは一時に変ずる
なれども、時節なる事、桜樹全体にて、若樹を生ず
変ずる事、ならざるものなれども、
樹の花の色の中、一枝、樹を離れざるものあり、
枝の変落る事、樹梢の間、変ずるもの
もあり、桜樹、変ずる時、必ず、
花葉、変ずる

追善の花の変

一 遅咲の花として桜の咲方より遅く花
一体花の丈低く高からず無弱なる樹
年長七四遅の遅咲は花の色白き
かさねて色長遅咲の花は他色の花にて
なるゆえに只物凄くもひ愛しかるる
支所無之 桜花にて花数多き 枝
蕾ふ長夏 陽に花 枝に咲て蕾
紅色にして遅咲の花は活る

俄別の花活方の変

一 旅を門出に花活る変 花葉を張る一つん
一 枝ハ能く長見 蕾を長て活る
俄別ハ 柳を活る変 古変有て諸活
柳を活る変 之を柳の枝に自然と出る
枝ちかハ長花を活る方は事の多活
柳の糸命 蕾に むを活て活る変 俄別の古例
時に之の 桜別に 変むるハ月を主て

[illegible]

[illegible]

花同南の段

一 [illegible]の花大小多き花の位一[illegible]をいつも
[illegible]向て活る事[illegible]
の[illegible]多いつも上座へ向て活る方よし
只花を活る時其[illegible]を[illegible]花を[illegible]
位[illegible]同南を[illegible]花同南[illegible]

水物の花の段

一 水物の花小[illegible]葉を[illegible]山[illegible]入花[illegible]
ら[illegible]花を[illegible]只根[illegible]花の根を
花一向て活る[illegible]南の[illegible]の[illegible]
[illegible]花を切[illegible]水[illegible]切る
花を根[illegible]水[illegible]
[illegible]南[illegible]の[illegible]活る
[illegible]水一[illegible]活を[illegible]日[illegible]の花

相面をしきりの

柳曼物語の文

一 柳曼いつて庭の門格別高く折名花を
有し是ハ世の庭ハ此ハ者の好なり
柳曼物をする事ハ天井絵五寸下ケ
行を形文庭の其向ハ西之ハ名花を
枝葉たる庭ハ高き五寸程下がるを
方長能しの

花合せの文

一 花をもつて其名を向い合ものを語文し
枝を見ハ踏し見るハ仲ハ名ハ所ハ見花の
其名ハ西向い合ものを数婚ふ文

花服の文

一 花枝をきりの所ハ花をおひ京
高く色かをする花を一二ハ人ハ花
を見しむいすき花て行らの紀新

形色ハ其時宜ニ依テ葉ニ枯葉ヲ
行ふ事ハ其時を考へ去る
事肝要なり

二立切之立物葉多ケの事

一花ハ葉ハ花ニ先きたるもの故花ヲ正ス
之ハ三ツ之立ツ上の立ハ葉ニ多ケを活ケ下の
立ハ花を入る時ハ逆のごとくなれども是
ハ一の心得なり後日活ケ花を出ふ

先ハ生ずるもの故ハ上の立ハ葉物を
活ケ肝要之二立切ニ立切ニ上の立
ハ物の葉中ニ多ケを活ケ花ニ立ハ
上の立ハ葉中活ケ中下の立ハ立花を活る
事之二立切ハ上ニ立物の葉下ニ花と心得
事ハ一ツ立物中ニ多ケ心得る方
ニ

去間ニ曼物活ケ

一春夏ハ葉の茂り枝を長く伸ばし
自て活潤を社をハ枯枝と色自て活潤を
枯て黄物ハ自然と風流なるこの外色は
活潤ハ外色枯を活潤方よし

時節早咲分別の事

一諸花諸草も活咲ハ何ようなる一種ケ様は
出さるものと其時の花ぶり活潤要し
活咲と早咲分ハ遠ふこの活を能く

吟味の上活潤なる早咲ハ色ら美麗なる早咲ハ
一種活潤して活ハ長枝ハ活さるもの
殺ら早咲ハ是美麗のこの其花活をん

一枝の活潤なるこの

庭角枝を花生る事

一庭の長右湯枝を長く折折を打花花生
一京切一文字に間ふを愈花生る事活潤何分
也生花の正面を見ゆるこの方向を活潤

入る花生の図

一入る花ハ平物花ハ其の円一筒にも焼の事
入るうて花生る事と花ハ敷て之延さるあを
ぬるゆえ也もしも花生ハ其の円一筒し
片寄せて活るゆえ偏の事知るべし

平生の花の図

一却て花ハ平生の時候ゆえて花を用ゆる図
勘弁有て春の花を多く用ゆるハ平生の
意を以て貴殿の花を当ら用ひ活る図
貴の花を春の中ゆえ活る図是亦同様の
仕方ゆえ平生ハ只図
其時ゆえの花を生るゆえ其花葉の変る長る
図是亦活る図所要と大体二月
上旬さかりの花を多の用ひる図平生
中用ゆえ貴殿の意味ハ何ゆえ活ハ只
一色ゆえ用ひ其所花の頃ゆる事

思い出の変

一 おもい出て此の花二種ありて七篇迄活かゆる変古伝
活る歌度し振をの〳〵
かつて古人も振りの為に行い〳〵変者は見を
乱曲と云ふ且花の言葉者〳〵それぞれを数
を入れ生かへる自然と自然かのふらの
形れい振り活この形いとも
大輪の変活る変

一 大伝 牡丹者紫大筒の変を別て。牡丹は
一輪生を張る〳〵先答はぶい二輪変答者
之者牡丹一輪形ふ葉を数を張りてとし
答はぶて二輪生る迄葉を数をとし角葉
迄小さき葉者を数を変也一つ〳〵を六面
同の変を活る変牡丹の詠者者葉に用る
の変形れを牡丹と云ふ赤振剣の変也不ふる
こうへて土場活る変と勿論宮仲の花れい

一色数生ケもの多くあれ牡丹ハ大ぶん細口
一文字筒の新しい活方也一輪こゝろゝ
かざるべし元ゝ貴の花ゝ和漢ゝに
ものゝ多くの所をハ貴賤の花也活方ゝ
健生か活方要ス

玉茅の花の図

一玉茅の時客相手玉茅の花ハ客迎
活方の上座ゝ向板なゝゝ花生ゝ

時ハ花ゝ上座花留相生脇ゝ
其上座ゝ留ゝ用ゝの不ハ玉茅の花ゝ
の中相生相客ゝ客次の客ゝ活方ゝ
者ハ支流ゝ客人一ゝ帰迎の挨拶有
ゝ時ゝ出ゝて帰ゝ帰ゝ出ゝ
活方ゝ活ゝの花ハ大切ゝ相
切ゝ挨拶ゝ出ゝ生活ゝ
座ゝ座ゝ玉茅の花ゝ向ゝ花の

一 [illegible] 参人[illegible]事[illegible]勝負[illegible]門[illegible]
[illegible]上[illegible]流方を[illegible]参人二名[illegible]名
名〻定[illegible]の[illegible]

花伝書の[illegible]

一 [illegible]花を[illegible]ふ[illegible]ふ[illegible]ふ[illegible]事[illegible]
伝書[illegible]所を[illegible]たる[illegible]能
花[illegible]合[illegible]ら[illegible]人[illegible]名[illegible]
[illegible]能[illegible]花の名[illegible]

[illegible]要[illegible]合て女[illegible]ふ[illegible]合の
花有[illegible]の故別[illegible]を[illegible]下[illegible]所要[illegible]

貴人の前[illegible]花[illegible]

一 貴人の前[illegible]花[illegible]ふ時[illegible]
伝[illegible]花[illegible]の切[illegible]流[illegible]散[illegible]
[illegible]ふ[illegible]の丑[illegible]の
貴人に向[illegible]伝[illegible]流
花の[illegible]流[illegible]

只何方にても活をうしなひ貴人の
座敷に用の赤花の者を掛る事
貴人合好き者は花はいの体の大花を
活る時は格別の流儀先生伝授の
如き者

貴信の景にて花生る図

一大信心格信心其外信度の花を色紙短冊
の後色合を変ぬ花を活るなり是ハ

好き者は格別の流儀の
花生る如き景

花花生の図

一花花生は唐物と和物と是唐物の
篭形ハ和の花に成る自然と活なく
花自然の花形を見出さるるに
活形を考る花の中央にて
上は枝葉の見出ハ可用格と
唐物の花ハ

花葉に藤枝を以用ひて其の用ハ花葉は
ハ色も味も共に一致して能く紙を以用ひる
事なり

女客の時花を生ける事

一振剪女客の客迎ひ為るに用ひられ度
事の花なれ共葉を少く花を多く入る事
二三切なれ共切の間ハ上枝を以て
下の枝に花活る事を無る為なるの
の花ハ間振を一二寸程上方ハ葉の
無なれ共上る時ハ活る様に活る也
下に成る事に先生物を活る事

焼物花生活の事

一唐物の花器ハ和の花を用ひ活る
事なれ共枝葉を少し
根元を少く活る事
振剪を以て活る事
振剪と花を生ける事

深き物紙の深きさるに花を活ける方
す

年物花瓶の内の変

一焼物の年物に花留鑓書小石等を
用ひ花を活ける花の活け方

瓢に花活る変

一瓢に花の用る花器の有りを活方の論と
也花をうつして花の用る外へ出し活る

有り藜蘆一式瓢を活る変古変ねを也
瓢に相面の花藜蘆を張りて瓢の口の
外へ葉を出す変歩て活る張り花の用法
活る変所要の物こと共醤鶴八昔古堂
遠州信徳平旨の山中屋の形柄雪中
形ちの山の中腹道のかたらに赤を張
花をる花活る其内より然も藜蘆生し
たるを見る形ちの瓢の変生を藜

四方に素蓋を張る事は於所々
を以て支傳授し時々諸流を以秘を
支之云り伝りて宗の名外一流の事
因て五行の段を元流かるる事之流てさい
葉を集樒を行を也抱如く抱を合具同者
実を以て也実の色なざる因の初りては
葉を結く流るなり之純色なる時色に六葉の
因一二枝ハ延びざる葉をつゝいては所よりて

流の葉一枝ハ宗の外一出てるるかゝれ
実の数葉を多きハ之を長しきこと大体七ツ
九ツ位迄二葉迄時ハ実二なて数
九ツ位十一位迄よりて長合別て瓢の瓢ハ葉の
さて無なるに生る事肝要之遠別花道の
好き間く風雅ハいさ所有人なて諸流を見を
用い傳授之具法を伝授て大事を伝授
いる人業之之数多好者数に物なて遠別

又支瓢の花番を中花と寸切にして出生
枝に用ひる葉なしこれの出生を用ひ
是大業なの好にて唱て活盛と改る
出生を用ひたる物を活る花活る義記ハ
枝を活物瓢支也大体其花ハ仕て
仏前を活る活る花の内に活支を出すなり
集の花を活るハ一枝に花の内に活る支
花をよりて多く活るなり義記ハ
活る支也花の内に活る花の内に
支枝をなして其花を結ぶ並に活る支枝をも
枝ごの花番ハ大体なるに正面に水揆をして
無瓢を共合花を活る支也庵の在に無ハ
左右に二枝を出す高に花の見
出る庵枝をハ多ハ其時宜に成る
唐口花瓢に花活る支
一是ハ大体枝に活る時の支也番の

百十文ずつ小石の向方に何程とも所書を
て活るなり 解花葉 穂茎 書小石の数しを
入金て花をするなり 古伝るの振方しょ水を
活る書を見て実を花を活る又東山殿御時代
略之なり 武新出帝と云る人馬鹿の教を
立花者之所与用ひなるとき新出帝小法没后
千利休と略を号原道の名人教書切水名を
仕物と利休年物を花を活る 〇如形之花

立ずを入用ひ活るは 後流花留を稽古の
物を用ひる又略を 水を生新生新又
立ずを活る生新の花留用ひて必山里の生新
は用ひずなり

高ずを花をする又

一一文ずつ筒を花をする口茎の長さ一向花
ふをずきなる大体を立て活る又略を
自然の面振を活ひ其中ずを出す

いつを船さきに抱へ望み乍ら流る事

船頭は流る事

一入船の船ハ底の中央を目当軸先を無物の
方へ向て漕ぎ乍ら流るハ其の気を帆柱の心よ
りて流る事受也故の櫓を櫓櫂をさし入る
事に物ハ左を右に流る事也船の向なるを
見切る事是瞬ふ中ニ上を投葉を落ふ
事ハ流るゝ所出船の船ハ入船を右に流る事

左様なる心ニて葉出を如葉を見て物様
を以其水ハ入船ハ口義ハ向ニ無り船の船ハ
流れるゝの曼物の船を先を事ハ
大体様を心ハ流れ様ハ流る事見ハ心電
丹を流り軸先を右ハ舵流是ハ重船
る時ハ様ハ舵ハ流て物漕を舟ハ舵
軸先を右ハ舵ハ重船ハ寄て流る事
出船入船の船ハ舵を常の船

毋の屋住も屋敷を法度に従ハ因果を
ふ之用捨吉或ハ法解ハ仕る時の事之
を之如者も法方仕る時ハ取物を
頂しいつれも法の法方ゝ之ふ之さられハ
大体の事を用ひもしは長大体の欠言ふ
先用ひさる事を事